
宇宙禅寺ワットロンチャン買収の謎 松浦ケント

matsuura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙禅寺ワットロンチャン買収の謎 松浦ケント

【Nコード】

N5242U

【作者名】

m a t s u u r a

【あらすじ】

私立探偵松浦ケントは、大富豪の一人娘マーシと結婚した。

同時に、マーシの父親がキングタイ惑星の禅寺・龍泉寺ワットロンチャンを買収した。買収には僧籍が必要だった。

ケントは僧籍を取るため、3ヶ月家を不在にした。ケントが僧籍を取得して家に帰ってくると、妻のマーシが消えていた。

20110625

dNOVELS

投稿

私^{わたし}、私立探偵の松浦ケントは、ラオ第五惑星の大富豪の娘マーシ・リムと結婚した。彼女の父は、宇宙でも有名なリチャード・リムという大富豪だった。

このとき、ケントは男盛りの40歳、マーシは成熟した甘美な芳香を放つ35歳だった。

12年前、私がラオ第五惑星へ森林資源密輸グループの摘発の仕事で行ったとき、マーシが私の案内をした。

それが、彼女との初めての出会いだった。

私が結婚を決意したのは、ラオ第五惑星に居たマーシからジャパ国にいる私に愛の衛星電話が掛かって来た日だった。

愛の衛星電話を受け取ってから結婚するまでの時間は短かった。

しかし、結婚後の長い生活を二人でどのように暮らして行けばいいのか、妻との日常生活のギャップをどのように埋めていくのかを考えることが、新婚貧乏探偵の私に与えられた当面の仕事だった。

「まだ、結婚したばかりなのに、なぜ、おれはこんなにいろいろなことを考えなければならぬのだ」と、私は思った。

松浦ケントは、毎年、ジャパ国探偵協会の調査によると、探偵部門でベスト10に入っている。彼の真っ黒な髪とヴァイオレットの虹彩を放つ瞳は、俳優のゲリー・クーパーを彷彿^{ほうふつ}させるようないい男だ。

そして、ゲリー・クーパーが「真昼の決闘」で見せた清潔で強い正義感（sense of justice）と優しい心を備えている。彼は、人を腐敗させ、理性を狂わせる権力や金銭を嫌う。

二人の結婚が決まると、大富豪の独り娘であるマーシは、私のために住みやすい豪華な黄金のケージ（檻）のような家を用意してメ

イドも雇った。このときから、マーシと私の間には不協和音が鳴り出していった。

私たちが結婚してから、まだ、4週間と4日しか経っていなかった。しかし、いつ離婚するかわからない。なぜなら、私は貧乏探偵で、彼女は大富豪の独り娘だから。

私たちの新居の家賃は私の月給よりも高い。家賃は彼女が払う。

マーシは、スペーストヨタリムジンを私たちの新居の前に止めた。私は、ジャパ国生まれだが、宇宙京東以外は不案内なのだ。

「ヨーキータウンは、ジャパ国の新しい高級リゾートエリアなのよ」「この街で出会うチャーミングでエレガントな女性の5人のうち3人は、必ず、スペースヨーキー（犬）を飼っているの」

「だから、この街をヨーキータウンと呼ぶようになったの。会員制のプライベートビーチもあるのよ」

「だから、シーズン中、ヨーキータウンにこの家を借りたの。この街は、少しエレガントぶっているけど、きっと、あなたに気に入ってもらえるわ」

「この家のどの部屋も、テラスかプールに面してるの」と、マーシが言った。

「エレガントぶっているわりには、この家のプールは小さいな」と、私が言った。

「だけど、プライベートビーチがあるから、いつでも泳ぎに行けるわ。この家は、高級プライベートビーチのフリーパス付きなの」

「それから、もう、この家のオーナーからプールにダイビングボードを取り付ける許可をもらってあるわ。」

「ベッドルームは二部屋しかないけど、主寝室には大きなハリウッドスタイルのベッドがあるわ」

「5人ぐらいが伸び伸びと寝ることが出来るのよ」と、マーシが言った。

「それは便利だ。夫婦喧嘩をした時は、お互いに離れていることができるからな」と、私は冗談っぽく言った。

ハリウッドスタイルのベッドとは、ベッドを2台くつつけているので、ハリウッドのスターのように容易にくつついたり離れたりすることができる。

「あなたの口の悪いのは、少しも治っていないわね」

「この家のバスルームは素晴らしいの。ヨーキータウンでも珍しい温泉付きのバスルームなのよ。装飾は高級タイルを使い、最新の大型マイクロバブルバスもあるの」

「あなたが、このバスルームを見たら、絶対、入りたくなるわ」

「化粧室は、足首までもぐるような毛足の長い魔法の絨毯のような真つ赤なカーペットが、フロア一面に敷きつめてあるの」

「私の好みよ」

「化粧品は、シャネル、エステイローダー、資生堂、CD、サンクーランが、ガラス製の棚一面にのっているわ」

「それから、トイレは完全な個室で、トイレの蓋には女神が浮き彫りになっているの。もちろん、ウォッシュレットよ」

「さっそく、そのエレガンスなトイレに行きたくなった」

「冗談は止めて、さあ、家に入りましょう。」

立派な家だが、装飾過剰気味だ。

2 .

二人は疲れたので、シャワーを浴びてベッドに入った。

「どうして、あなたと結婚したのか、いまでも分からないの。たぶん、あなたの粘り強さに負けたのかしら」

「だけど、私は、結婚するまで12年待ったわ」と、マーシが言った。

「それから、あなたの名義で、口座も開いておいたわ」

「感謝している、しかし、おれが、その金に手を付けないのは分かっているはずだ」

「じゃあ、これから私たちはどうすればいいの、ケント」

「私は、あなたを精一杯幸せにしてあげたいだけなのよ」

「あなたを独り占めできないことは、分かっているわ」
「誰よりも、私はあなたを愛しているわ」
「そして、あなたの一番の魅力は、誰に対してもあなた自身の考えを曲げないところよ」
「おれたちは、これから、二人で協力して、乗り越えなければならぬ困難に出会うだろう」
「しかし、おれは、永遠にミスター・リムには慣れない」
「おれも、きみを幸せにしたい」
「しかし、おれには、どうすればいいのか、分からない。今は、なんの策もない」
「金持ちの妻と結婚した貧乏探偵が、今、どのような行動を取っているのか分からなくて困っているのだ」
「しかし、明白なのは、おれが独りの貧乏な私立探偵ということだけだ」
「今まで、ちっぽけなオフィスで探偵の仕事をしてきた。そのオフィスが、今のおれを育てた」
「だから、結婚しても、相変わらず、ちっぽけなオフィスで働く探偵でいたい」
「それからしばらく、きみのリムジンを借りてもいいかい。2、3日経ったら、京東へもどって、おれのスペースストヨタウッドを取ってくる」
「せっかく、あなたの為に口座を作ったのに、どうして、あなたは時間をかけて京東までスペースウッドを取りに行くの」
「なんだか無意味なように思うわ。あなたの口座が、無駄を省いてくれるのに」
「だけど、おれはこういうスタイルなんだ」
「ケントは、電気を消した。」

3 .

あくる朝、無音・無振動のようなスペースストヨタリムジンを走ら

せて、街の不動産仲介業者のオフィスへ行った。そこには、禿げ頭の愛想の良さそうな男がいた。

「ここはリゾートタウンなので、オフィスは見つけ難いのです」

「ヨーキードライブならオフィスがあるかもしれませんが、家賃が高いですよ」

「ダウンタウンかその辺の横丁にあるオフィスが欲しい。ハイストリートにあるオフィスを借りる金はない」

ケントは、名刺を渡して、私立探偵の免許証のコピーを見せた。

「ここはリゾートタウンなので観光客をだいじにするのだ」と、彼は疑わしそうな顔で、そのコピーを見ながら言った。

「あなたが浮気調査や離婚事件を扱えば、この街の人はあなたに好感を持たないだろう」

「それに、警察もよろこばないだろう」

「おれは浮気調査や離婚は扱わない。しかし、人から好感を持たれたこともない、好感を持って欲しいと思ったこともないよ」

「それよりも、何か物件はあるのか、ないのか」

「物件がないのなら、無駄話を止めて帰る」

「それから、警察はどこだ」

「この通りの突き当たりだ」

「ありがとう」

私は、ゆっくりとその不動産仲介業者のオフィスのドアを開けて、外へ出た途端に、長身の色白の男が私にぶつかって来た。

「おれは、ネルソンだ」と、男は言った。

「おまえは、探偵の松浦ケントだな、用事がある。おれに着いて来てくれ」

「おれは、昨日この街に着いたばかりだ」

「この街には、ネルソンという名のおれの友達はいない。今、事務所を探しているんだ」

「急ぎの用だ。わしは凄く困っている。優秀な腕利きの探偵が、今、必要なんだ」

「しかし、おれは用事で警察署へ行かなければならない」
「ネルソンさん、おれの事務所が決まってから、また、訪ねて来てくれないかな」
「わしは、それまで生きていられるかどうか分からないんだ」と、彼は静かな口調で言った。
「通行人が、私たちの言い合いを立ち止まって聞いていた。」
「ここでは、ダメだ、話ができない」と、私が言った。
「警察で私の用事が終わった頃を見計らって、この電話番号に電話をしてくれ」と、私は電話番号を紙きれに書いて彼に渡した。

4 .

私はリムジンに戻って、携帯で、「これから警察署に挨拶に行く」と、妻のマーシに告げた。

そして、警察署に向けてリムジンを走らせた。公用駐車場にリムジンを止めて、警察署の中に入った。受付で婦人警官に担当部署と巡査部長の名前を尋ねた。

受付で、教えてもらった部屋を確かめて、ノックしてドアを開けると、白髪の穏やかそうな巡査部長がいた。

「私立探偵のケントです」

「適当な事務所が見つかり、許可がもらえたら、この街で探偵を開業したいと思っています」

私は、その巡査部長に名刺を渡し、私立探偵の免許証を見せた。

「きみは、浮気調査や離婚関係を扱うのかね」

「浮気調査や離婚関係は、扱わない主義だ」

「きみがこの街で警察の仕事を横取りさえしなければ、共存できるだろう」

「おれは、いつも、そうしようと思がけている」

「しかし、どこまでが自分の仕事か、どこで手を引けばよいのか、おれにはその匙加減さしが分からない」

「困ったものだ」

それを聞くと、その巡査部長は、受付けにいた婦人警官を呼んで何かを小声で尋ねた。そして、

「このヨーキータウンを私立探偵がうるつくだけでも迷惑な話なのに、大富豪の後ろ盾がある私立探偵にうるつかれるのは大迷惑だ」

「巡査部長、おれは孤独だ。自力でやっている。ほとんど貧乏人状態だ」

「さつき、そこでネルソンという男にぶつかった。その男を知らないかい」

「その男ならよく知っている。この街では有名なトラブルメーカーだ」

「彼のトラブルが、おまえさんに感染したら困るんだ」

私は立ち上がった。

「今日は、事務所を開くことを知らせに来ただけだ、ありがとう、巡査部長」

「その件は了解した」

「しかし、おれは、お前さんが一日も早くこの街から出て行ってくれることを望んでいる」

私は、その巡査部長の部屋を出てドアを閉めた。そして、受付の婦人警官に挨拶をして、警察署を出た。

「昼食は、家で一緒に食べよう」と、私はマーシに携帯で連絡してから、妻のリムジンに乗って家に帰った。

5 .

私がリムジンを家の前に止めると、妻のマーシが玄関で待っていた。マーシと昼食を食べながら、私は彼女に午前中の出来事を話した。

さきほど、ラオ第五惑星にいるマーシの父親から電話があったそうだった。

「父が、禅に狂っているようなの」と、突然、マーシが言った。

「最近、父はキングタイ惑星の禅寺へ通っているのよ」

「どうして、いまごろお義父さんが禅に狂ったのだ」と、私は尋ねた。
「理由は、わからないわ」

「最近、父が、キングタイ惑星の禅寺を買収したのよ」

「買収した禅寺のなまえは？」

「禅寺のなまえは、フット・ロンチャン竜泉寺」

「父が禅寺を買収したので、みんな困っているわ」

「なぜ、困るんだ」

「家でも、父は母に禅以外のことを話さないの。だから、母も、父の禅狂いには怒り心頭なの」

「そのうえ、私に僧籍（得度・受戒を経て登録された籍）を取れと、父が言うのよ」

「キングタイ惑星で禅寺を買収する場合、僧籍の所有が不可欠なのよ」

「本人あるいは家族のものが、僧籍を持っていない場合、3年以内に僧籍を取得しなければ、買収した禅寺の所有権を放棄しなければならぬ」

「キングタイ惑星の禅寺では基本的に、女性の僧籍は認められていないの」

「もし、女性が、キングタイ惑星で僧籍を取るには、厳格な227戒律全てを乗り越えなければいけないのよ。それに比べて、男性の場合は10戒律を守って生活をすればよいの」

私は、妻のマーシが私に初めてSOSのサインを送っているのかなと思っただ。

「キングタイ惑星で、僧籍を取るのにどのくらいの時間が必要なんだ」

「僧籍をとるのに、人によっては1年から3年ぐらい必要らしいの」
「悟りの速度は各人各様だから、学校のテストと違って時間が定まっていないの」

「それはハードだ、困ったな」

「せっかく、おれが開業の準備をしているのに、厄介な話が飛び込

んで来た」

「この禅寺の話から、離婚と背中合わせのような危険な香りがするようだ」

「まだ、結婚したばかりなのに、なんと可哀想なケントだ」と、内心想った。

6 .

昼食後、妻のマーシは、彼女のスペーストヨタリズムジんで、彼女の友達が経営している美容院へ行った。私はプールサイドで寝そべりながらひとり考えていた。

こんかいの禅寺買収の話は、タイミング的に常軌を逸脱いっだつしている感がある。

妻マーシの父親がキングタイ惑星の禅寺を買い取って、マーシが私にその禅寺の買収の話をするタイミングが良過ぎる。何を考えて、私たちの結婚と同時期にその禅寺を買収したのか？

たぶん、私の手の届かないところで何かが起こっている。或いは、誰かが、何かを起こそうとしているのか？

綿密な計画で、誰かが、私を嵌めはようとしているのは確かだ。

妻マーシとの離婚か、僧籍取得チヨイスの選択は、根底にある問題を単にカムフラージュ（偽装）しているだけなのか？

真の目的は、どこにあるのか？

妻のマーシも、この計画を知っているのか、それとも、彼の父親の計画なのか？私の脳裏には、色々な疑惑が浮かんできた。

私がキングタイ惑星の禅寺へ僧籍取得のために行けば、全てが望ましい状態になるのか。

望ましい状態の意味が分かれば、その望ましい状態の内部に隠された問題がクリアーになる。

私がキングタイ惑星へ行って何か僧籍を取るため以外のことを禅寺で要求されるのか、もし、禅寺へ行ったとして、私は、一年で帰ってくる事ができるのか。

知らない誰かが、私がこの街から去るのを望んでいることは確かだ。それも、永久ではない。その誰かが、目的を果たしこの街を出て行くだけの時間が必要なのだ。

私は、インターネットで龍泉寺フットロンチャンを検索した。教育熱心そうなお寺のようだ。付属幼稚園から付属大学までの徹しい一貫教育をおこなっている。禅寺としては豊富な資産をもっているようだ。

私のキャラクターを知り尽くした人間がこの難解なミステリーを考案して、私の結婚プレゼントとして贈ってきてくれたのならば、とてつもなく意味深で、リスクイナプレゼントだ。

私はマーシと離婚したくない、キングタイ惑星の龍泉寺フットロンチャンへも行きたくない。私にとって、僧籍は無用の長物なのだ。

今回の禅寺の買収が失敗しても、大富豪のマーシの父親にとってたいした損失ではないのだ。

しかし、今、一番の問題は、私が龍泉寺に行くか、このままヨーキータウンに留まるかだ。

私が、その禅寺へ行けば問題は解決に向かって踏み出すことになる。

今回の問題は、短時間で解決しなければならぬ。時間の浪費は、許されないのだ。

だから、私のキングタイ惑星フットロンチャンの龍泉寺での滞在期間を如何にして短くするかが、今回の問題を解決する最も重要なポイントだ。

僧籍取得の問題は、マーシに再度確認して、「とにかく私は禅寺に行こう」と、決心した。

美容院から妻のマーシが、リムジンで帰って来た。私は、玄関で彼女を待っていた。

「おかえり、マーシ」

「僧籍取得について、すこし話があるんだ。聞きたいこともある」

「先に、シャワーを浴びてもいい」

「どうぞ」

「すぐにシャワーをすませてもどって来るは」

10分後、シャワーを浴びて部屋着に着替えた妻のマーシが、私の居るリビングにもどって来た。

「待たせちゃって、ごめんネ」

「だいじょうぶ、仕事柄、おれは人を待つのは慣れてる。12年間継続して女を待ったこともある」

「では、その12年間待った女に聞きたい。今、僧籍取得の話はどこまで進んでいるのだ」

「なにも進展していないの、どうすればいい」と、逆にマーシは私に質問を振って来た。

「キングタイ惑星に行つて、最短で僧籍を取るのに、どのくらいの時間が必要なのだ」

「私の父が、キングタイ惑星の龍泉寺にアンダープレッシャーをかければ、たぶん、最短3ヶ月ぐらいで取得できると思つわ。だけど、最短3ヶ月という数字は、確認が必要よ」

「きみは、ほんとうに僧籍を取得する気はあるのか」

「その手のことには全然興味が無いの、無信心者だから。それに、自由にシャワーを浴びることができない生活なんて、私には考えられないわ」と、妻のマーシが言った。

「きみの親戚のなかに、禅に興味を持っている人はいないのか」

「いないわ。私の親戚の人は、皆、ビジネスにしか関心が持てないの」

「最悪の場合、この僧籍取得の話はどうするつもりだ、マーシ」

「分からないわ。どうすればいいの」

「こんなとき、野球ではピンチヒッターが出る。僧籍取得に、ピンチヒッターは有りなのか」

「たぶん、ピンチヒッターは有りよ。父に聞いてみるわ。それで、ピンチヒッターは誰なの」

「きみの最後の切り札は、おれだ」と、私が言った。

「ピンチヒッターを出すのには、条件がある」

「ピンチヒッターを出す条件って、なんなの」

「必ず、三カ月後に、キングタイ惑星からこの街に戻って来て、きみとの生活を継続できることだ」

「嬉しいわ、ケント。だけど、無理しなくていいのよ。それに、あなたと3ヶ月も離れて暮らすなんて考えられない。とても寂しいわ」

「おれも寂しいが、無理はしていないよ」

「ピンチヒッターの件、ほんとうに決めていいのね。あなたの出した条件は、必ず履行するわ」

「だけど、私には、あなたのない生活なんてとても考えられないわ。少し心の準備をさせてほしいの」

「じゃあ、きみのお父さんに確認を取って、おれのキングタイ惑星ワットロンチャイの龍泉寺へ行くスケジュールを決めてくれ」

「おれの方は、まだ事務所も見つかっていないから、今は自由の身だ。きみの決めてくれたスケジュールに合わせてキングタイ惑星へ行くよ」

その夜、妻のマーシが彼女の父に確認を取った。一週間後に、私がキングタイ惑星に行くことが決まった。

8 .

スペースシャトルで、ジャパ国からキングタイ惑星まで約5時間ワットロンチャイで着く。バンクックのスペースエアポートから龍泉寺のあるバンコクワットロンチャイまで、スペーススカーで約30分だ。

龍泉寺は、もちろん、キングタイ惑星の王室から特一級ラチウラマハウハンの認定を受けた寺院で、キングタイ惑星では数少ない禅寺のひとつである。

敷地面積は40ライ(64,000)。龍泉寺(ワット論チャイ)は、南寺と北寺の二つの寺で構成されていた。

北寺は本堂と図書館、付属学校の本部が置かれ、一般公開されて

いる。一般人の立ち入り禁止の南寺には、修行道場・宿舍等がある。
ワットロンチャン
龍泉寺での私の生活は、最初の1週間が、食事とトイレの時間以外は一日中、参禅入室だ。
さんぜんにゅうしつ

就寝時間が来ても、足が痺れてしばらくの間、立つことも出来ない。参禅恐怖症になりそうだった。

自由時間は、3ヶ月で僧籍を取得しなければならない私のために、毎日、臥龍軒老師がマンツーマンで講義をしてくれた。

私の僧侶としての一日

04:00	起床
05:00	読経
06:00	托鉢
09:00	朝食
10:00	お勤め
14:00	昼食
15:00	自由時間(自習)
18:00	読経
21:00	就寝

ワットロンチャン
龍泉寺に來ると、1日2食の生活になる。慣れるまでに少し時間が掛かる。

最初の1週間が過ぎると食事の保証が無い。托鉢で、自分のその日の糧を得なければならぬ。

偏食の多い私には、托鉢で得た糧がほとんど食べることができず、空腹の毎日が続いた。

黄衣を着ているため托鉢で寺を出てもよく目立つ、一日中、緊張した生活に追われた。

キングタイ惑星では、朝3時30分ぐらいから明るくなり、気温は33度から43度。

炎天下の中、托鉢にまわるので、私は托鉢中に熱中症にならない

ように祈った。

3ヶ月間、龍泉寺フットロンチャンという悪魔のような大きなアイソレーション・タンクに、私は感覚を遮断された。

そして、幻覚のような外界からの入力のない生活を体験・実践し続けた。そのおかげで、私は幻覚を何回か見た。

そして、私は、禅ワールド（World）を達観したような錯覚に陥った。

形は如何様であれ、私は3ヶ月で僧籍を取得した。

「明日、きみの待っている新居へ帰るよ。朝一番のスペースシャトルに乗るから、夕方には着くよ」と、妻のマーシに衛星電話した。

「気をつけて帰って来てね。明日の夜は、久しぶりに、二人で楽しい食事をしましょう」

「懐かしい」3ヶ月ぶりに、妻マーシの声を聞いた。

「明日の夜が、楽しみだ」と、私が言った。

9 .

夕方、ヨーキータウンの家に着いた。私は、玄関に妻のマーシが立っていたような気がした。

私は家の中に入って妻のマーシを呼んだが、返答はなかった。

メイドに、妻のことを聞いても、

「先ほどまで、奥様はそこにいらっしやいましたよ」という返事しか帰って来なかった。

さつきまで、妻のマーシが居たのは確かだ。まだ、その部屋にはマーシの温もりが残っていた。私がタクシーを降りて家に入るまでの間に、私の妻は消えてしまったのだ。

「これが犯人の真の狙いで、結末だったのだ」と、私は事件の真相を突き止めた。しかし、私の大事なマーシが消えてしまった。

私は、最愛の妻マーシを見つけ出す手筈を必死で考え始めた。

その時、「あなた、食事の準備が出来たわよ」と言うマーシの声で、私は目が覚めた。

夢の中でも、松浦ケントは、彼流かれりゅうの最高のパフォーマンスを見せ
てくれた。

それから三日後、マーシの父がほんとうにキングタイ惑星の禅寺
を買収した。くわばら、くわばら。了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5242u/>

宇宙禅寺ワットロンチャン買収の謎 松浦ケント

2011年7月6日07時26分発行